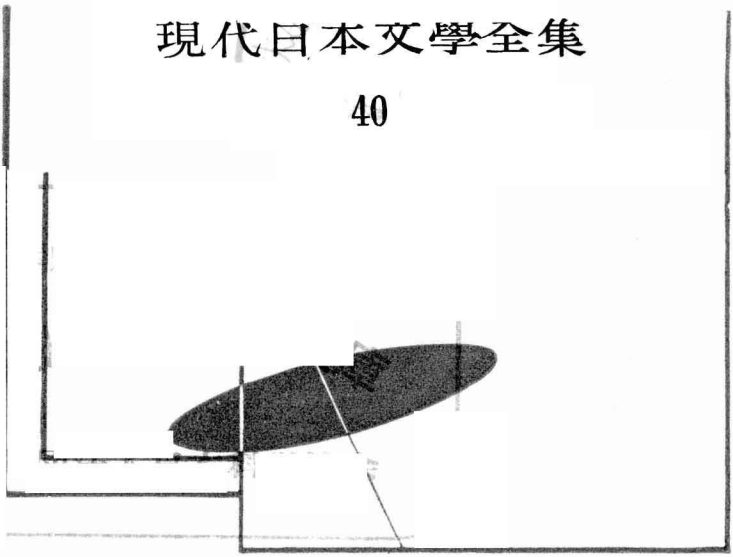
作雄繁曉
孝一
井崎村林
瀧尾外上

集

現代日本文學全集

40



筑摩書房版

現代日本文學全集 40

瀧井孝作
尾崎一雄
外村繁
上林暁 集

昭和三十年十二月十五日 印刷
昭和三十年十二月二十日 發行

著者
瀧井孝作
尾崎一雄
外村繁
上林暁

東京都千代田區神田小川町二ノ八
發行者 古田晁

東京都新宿區市ヶ谷薬町一
印刷者 草刈親雄

東京都千代田區神田小川町二ノ八
發行所 筑摩書房
(電話)東京二九局(29)七六五一(代表)
振替 東京 一六五七六八

整版 株式會社精興社
印刷 中央製本印刷株式會社
製本 中央製本印刷株式會社

瀧井孝作集　目次

無限抱擁……五
結婚まで……八〇
慾呆け……九三
積雪……九九
父祖の形見……一〇七
伐り禿山……一一五

尾崎一雄集　目次

暢氣眼鏡……一二五
擬態……一三三
蟲のいろいろ……一四三
美しい墓地からの眺め……一四九
痩せた雄雞……一五六
霖雨……一六七
町子への手紙……一九九
初冬……二〇八

外村　繁集　目次

鵜の物語……二一七
夢幻泡影……二四三
春の夜の夢……二五三
最上川……二六二
赤と黒……二七五
夕映え……二八二

上林　暁集　目次

薔薇盜人……二九一
ちちははの記……二九七
野……三〇八
二閑人交游圖……三三五
瀧井孝作（小林秀雄）……三八七
尾崎一雄論（淺見　淵）……三八九
外村　繁（淀野隆三）……三九六
上林　暁（山本健吉）……四〇〇
貧窮問答……三四三
晩春日記……三五三
聖ヨハネ病院にて……三六〇
月魄……三七五
解説……四〇七
年譜……四一五

装幀　恩地孝四郎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

瀧井孝作集

初心

孝佳

無限抱擁

一

一の一

淺川驛よりトンネルもなくなり空は夜明であつた。

車室の窓ぎはで一人、信一は、靄の間から麥の穗の赤むで居る有樣に向いて、

「もう麥が赤む」

と呟いた。麥畠は知らぬ間に色づいて居る。暫時心ひかれた。彼はまた

「戻つて來たなあ」

と自分に云うた。上の電氣の點つて居る、網棚に被り笠、絲立、岳樺の杖、(案内者が山刀で伐取り拵へて呉れた)其が脇に置いてある。

彼は溫泉で錆びた銀蓋の懷中時計を、セルの袴の上へ引出した。新宿へ到着までにまだ一時間の餘ある故、體は窓ぎはへもたれ彼は寢不足の頭を束ねた絲立へおし當てた。

淺い谷間の窓外に見える、東中野邊りで目が覺めた。車室に學生等が乘込んで居た。

信一は池袋までの切符故、新宿驛で降りて乘換をした。山の手電車の中で、彼の風變りの提げて居る笠が目立つた。

朝曇りの空だつた。池袋の道の上を歩いて來、路端の新規に店出した小間物屋の前で、信一は齒みがきの類を買つた。

何時もの雜司ヶ谷の友達の家は、空屋であつた。信一は其板戸の前で暫時へんな氣がした。目白驛の方角の引越先が貼紙に出て居た。

而して信一は復歩いて、尋ね當てた。

原中で平屋建で、友の古びた名札が門柱に掛けてある。生垣内は三坪程の前栽、其處の雨戸は閉され、まだ寢て居る。

其住居は始めてで信一は、起さずに一人門の前で立つて居た。信一は、盆槍佇むで旅行の引續の甘い感傷に浸るのだつた。曇の空から雨の粒が落ちた。僅かに降出し、信一は笠を提げて彳むで居た。

錢湯を思ひうかべた。一晩石炭殼を被つた氣持の惡るさ、草臥が錢湯でぬけるなれば、自身は色々の仕事のある體故、すぐ其にかゝれると思へた。彼は、歩き出した。

雨は本降りになり一時間程後、信一は戻つて來た。被り笠絲立で、湯上りの彼は汗ばむだ。着物の銘仙の羽織に沁こんで居る、溫泉の香がきつく匂つた。

門は未だ開かなかつた。

やがて、遲く起きた中田夫婦は、信一を内へ入れた。

彼は、雨水の笠と絲立は外へ寄かけ、上り口に袴を脱いで置いて、座敷へ入るのであつた。

床の間を見て、一寸見てゐた。白日掩荊扉とある半折の出來榮が目に附いた。

中田が薄目で、眼鏡の玉をぬぐひつゝ來て坐つた故、彼は尋ねた。

「先生の字」

「六花さんダ。先生の處にころがつてゐたのを貰つてきた」

中田は同人の書の會に加らぬ人であつた。其趣味は厭だと云うて、連中を傍觀してゐたが、之を表裝して居る處では、中田も何時か一歩寄つて來て居た。

信一は自身の今朝新宿驛へ着いた由を云うた。先づ仕事の方を共にやつてをる雜誌の運びを尋ねた。

友は肯き、今日校了になる筈でもう僅だと答へた。信一に向き

「德永君が心配して居た故、けふ逢ふと良い」

と云ふ。用向の話は其丈であつた。

例の女の方の話、兩方で口に云はなかつた。

信一は具體的な考へができてない故曰へず、中田は取留のない心やりの聽手になれぬ故。

「飯にしようや」

年上の友は膝をもち上げた。

柱など節々の多い茶の間に、食卓は備はつて居た。茶の間の隣の室には姿見などがある。

(中田は西國の方のくろうとの女と二人暮しを

して自分を立て貫き、三四年になる。今度は極く普通の借屋住居で、二人は平凡になつて落着いたのだ。)

信一は自分もやがて左うなる、自分の女との暮しを思ひ、茲の有様に氣注ぐのであつた。

丸揚のかづさんも坐つた。熱い飯で、やき海苔、うに、味噌汁の菜で、常の通りである。茶湯臺の傍で、彼の旅先の土地の事柄が話題になつた。

かづさんも、彼の事情は知つて居て其を口に云はなかつた。向合ひ面白くからかふには餘り重たい男だし、また道筋を漸と通つた自分共夫婦故、いゝ加減は曰へなかつた。

「やみさうもないナ」

信一は縁側へ起つて、空を見た。

「出掛けるかナ」

「うむ」

玄關でかづさんは彼の持物は

「預つて置きましよ」

と云つて、傘と足駄を揃へて居た。

左うして中田と連立つて出、信一は旅の引續の氣分は殆ど無かつた。

傳通院の前で、友と別れて彼は電車を降りた。××學寮で、恩人の德永翁に逢へる。それは商用で出て來て、國の子弟の居る學寮に泊る人であつた。

信一は昨年居た寄宿舍で、知合の學生に何氣ない顏で、廊下を通つた。

彼は德永翁と差向ひになつた。彼は自分の話は田舍で打開け、翁は上京後諏訪の方へあて手紙を寄越して居た。

「雜誌の方は、中田君ひとりのやうぢやつたから」

質實な翁は、仕事の方を心配してゐた。

「え、今逢つて話して來ました。これから印刷屋へゆく筈です」

彼の問題については

「戻つて來たら、先生も自分らと共に話をしたいと云つて居られた」

「はあ」

「今晩、皆で飯でもたべてだと良いな」

と云ふ。信一はH師に何か云はれる覺悟で

「ぢや、根岸のH師の宅に來て頂きます」

と其場所を定めて云つた。德永翁は肯いた。

十分餘り居て、信一は出掛けた。

路傍にある自働電話で、彼女へ戻つたこと云はうか稍迷つたが、今日は逢へぬ故と思ひ止つた。

例の神田の印刷所では、殘り少い校正で二人居なくてもよいので、信一は又、根岸へと向ふのであつた。H師に何から話す考へは別になかつた。

(女とのゆきたてを左に雜とかく)

吉原の口屋に勤めて居る女——本名は松子——を二ヶ月前四月から見染めて居るのである。

四月の十日に山谷で書の方の會合が、例會でなしに酒を飲む催しがあつた。席上友達の青舍にこんな事を賴まれた。昨日家を出た儘で內へ工合悪いしこんなに飲むと又脫線して明日中田と約束してある旅行が出來ないかも分らぬ、信一君共に家へ來て明日旅立させて呉れないかね、と云ふ賴みであつた。信一は青舍の事情を知つてゐた故、氣の弱い友の用心棒になる事を承知した。其晩新聞記者のSと青舍と信一の三人は吉原へ廻りお茶屋へ上つた。信一は酒飲ではないが附合し明夕方まで青舍の連れであると思つた。青舍は其晩も歸り外れた。あくる日信一は青舍と中田との旅立を上野驛で見送つたが。

そんな靈梅に青舍と共に出掛けて、用心棒の信一が却つて入つたのであつた。その朝、彼女に云はれた。

「お顏が、昨晩と異つて居ますワ」

友の青舍は十日程の旅行から戻つた。信一は入谷の宅へ出向き友と顏を合せた。旅行の土產話は胸ををどらせた。汽車の窓で見た向ふ山板谷峠邊の殘雪の感じ。山の肌に殘雪が川と云ふ字に消殘り素的な書の線に見えた話。又羽後の酒田には佛頂和尙の書のある話。某家の古い見事な座敷造りの話。こんどの總選擧で或人に一夜土地の遊郭を奢られて、翌日政談演說をした話。

而して旅して氣持の動いた故で、かなり捉はれない句作の出來た喜悅。其はこの頃信一も同じ故ノートを見せて喜び合つた。

信一は自身も話が溜つてゐた。口屋へあれから三度、と事を云つて「樹木か何か搖さぶられて居る樣な」自分の心持を訴へるのであつた。

、聞いて青舎は、其が戀だらうね君に其芽生が出たんだねとわく〳〵した。結婚生活と云ふ話まで出ると、青舎は肯かなんだが、しかし彼女の年齢――彼の二つ下の二十二歳――を尋ねたりした。

其晩中田もやつて來て三人で淺草の方を歩いた。信一が相手の女の氣持を懸念してゐる事を曰つたら、中田は

「相手は石塊でも瓦の片でもよいよ、自身が燃えて居れば何時か動く」

と中田の場合かづ女は後で動いた例を持出した。それから

「□屋では、女の居る場所は悪いね、やり難いね。君は思ひ斷るかかまはず突進するか、二タ途だ」

とズカ〳〵と云ふ。又

「これならと思ふ女はさう無いから、好きな女が見當ればとるのだが」續けて又「金があるとねエ、一ト月程居續して飽きがこなかつたら立派な者故、女房にするんだがね」

と、中田はあすこで五六日も居續せうものなら退屈で叶はない其經驗談を持出した。

足は何時か吉原へ入り例の茶屋へ上つた。仲之町の一番外れにある茶屋だつた。魚河岸××の若主人時分の青舎を見知る藝者が居て青舎は顔がきいた。女中頭の千代に信一の事を何かとたのんだり、青舎はその晩彼女を見る心組であつたが

「大店はシンミリしない。□屋は厭だ」

中田は持前を云うて肯かず、彼一人送られて往つた。

或日信一は青舎と雜司ヶ谷の中田の宅へ出掛た。もう五月に入つて居た。雜司ヶ谷で、青舎は來がけ電車の中で見かけた女の話を云ひ出した。信一は引取つて

「眞向ひに腰掛てゐた、佛像の顏のやうな娘さんでしよ」

と云うて又

「窓口から、頭すぢへ日が射込んでゐた故、僕はうしろの鎧戸を閉めてあげようかと思つた」

「まあ、信一さんは」

と、茲の細君は聞いてさう揶揄んだ。信一は之まで女などに目もくれない木强漢で通つてゐる故。

「物のあはれを知る人だ、ねエ、いゝね」

と、青舎は辯護した。信一は唐突に呟いた。

「旅行、しようかなあ」

――彼は彼女をあすこから出す資力は勿論ない、よし連れて來たにしろ其暮しの道も立ない身であつた。何處からも資は出さうでなかつた。彼の周りで一番生活の幅のある根岸の先生も此間「つゝじの白ありたけの金をはらひぬ」の句を作り、其清貧を打明けて笑はせてゐた位である。また信一自身の心持が、ぐらり〳〵動搖するのだつた。彼は彼女に逢ふ毎に其實生活が分り、彼はどぎまぎした。逢始の頃は只恍惚感に溷れたが、今はもつと息詰る狀態が多くなつた。併し其重荷は浪曼的なもの故に、彼の頭の方向を僅か反らした折

「旅行に出ようか」

と云ふ考へが出て來た。――

其詞を聞き友達は稍々面を上げた。

「旅行か、うむ宜いね」

中田は頷いて云つた。信一は思ひ迷つたがやがてそれを定めた。雜誌の仕事を中田に賴んで任せた。

根岸へ廻り先生に云ふ事とした。――この間、先生は其甥の受驗生の不勉强の話をした故、信一は自分の圖星を指されると思ひ、僕も非道い事をして居ます、と云つたら、君は未だ純粹な方だ、と先生が云つた――

信一は根岸で先生にあつて、唯旅行したくなつたと云つた。彼は女の上は告なかつた。先生は別に理由はきかず旅費を出して呉れた。

又、入谷の友の宅へ行つた。

「さうか、本當に旅行に出るの」

「えエ」

話して居て晩になり、青舎は雜司ヶ谷へ行かうと云うて、今晩は中田に敬意を表すと常談口で細君に着物を出させ、信一を伴うて門に出た。當時彼は茲から吉原の裏門へゆく坂道を「十五分間小徑」と名づけてゐたが、其道の方へ友の足は向き、オヤと思つて信一は續いた。

「立つ前に逢つた方よいねエ、自分も今晩は、見る故」

友の甘い味ひを彼はうけいれた。

「君は、女の人が僕を何う見たかを、たづねる

のだね。君と女の人と見方が似るか。わかるからね」

「では、今晩女のいふことを、出先で手紙に書きます」

「逢つた工合で、旅行は、變るかも分らぬねェ」

「えェ」

翌日彼の處へ青舍の端書が屆いた。啓、昨日之私は言葉も行ひもすこし脫線氣味の處があつたやうですゆるして下さい御旅行は決定しましたか是非さうなさる事を祈ります深く祈ります今日は朝からからだの工合がわるかつたのですが今はよくなつて仕事してをります。

信一は岐阜で約束の手紙を書いた。出立際に逢つても引留られる程でなかつたが、友は別れて旅立てと云寄越した、彼女の印象が悪いかと思へた。青舍の返事は田舍へ來た。

ゆうべは根岸の俳三昧でした此頃はあなたが出席されてゐないと淋しい心持になります あしたは私の家もう一夜は三の輪の三昧私はこの淋しい心持を續けねばなりませんね

あの時の第一印象は御目にかゝる形式がへんなものであつたのでめちやめちやになつてしまひましたあの方が私を外的ではありますがかなりよく見てをられたので驚きましたいや驚くといふのは仰山のやうですが私からは第一印象の外的丈でも握み得られなかつたからですどうも私といふものが時に臨みてしつかりすることが出來ないのを恥ぢます

それでこのことはこれだけにとゞめておきたいと思ひますあなたとして定めてはがゆい樣に思はれませうがどうか忍んで下さいさうしてこのことについては考へないで下さい色をつけないで下さい

あの部屋で病人のやうだと申上げたのを氣にかけて下さいますな何んでもないのですたんにあの時の感じに過ぎないのです

さだめし御淋しいことがおありでせう萬々御察し致しますどうか大事に旅行して下さい

一昨日德永君へはがきを差上げましたそれは內容は申上げずに只信一君の今の心持をやすらかにして上げて頂きたいといふやうなばつとした事を申上げたのです萬事あなたが德永君に御相談でもされる場合のきつかけにもと思つたからです

先生へは私が話をしました先生の心持は良好です御安心なさい

たよりを書くといふことは氣をまぎらすものです御たよりを下さい德永君に宜敷御傳へ下さいこれで擱筆しますどうも言足らないのですが

五月六日　　青　舍

――□屋ではお附合で上つた客には女を逢せない極りの由で、青舍は僅すれ違ひに相見た。あの晩部屋は扉とよぶ西洋間で、彼の寢床の傍に皆が附添うてゐて「病人のやうだ」の詞が出た。其處へ、彼女が新造と下新をつれて入つて來、友は起つて出て往つたのであつた。彼女は友達のことを「新規さんですわ」と云うた。シンキなる詞が呑込めず何度も尋ねて、若々しい人當世風、といふ意味が分つた。青舍はすれてゐない瑞々しい人故、其方面が第一番に映ると思へた――

青舍の手紙を德永翁に見せた。德永翁は商用で月末に東京へ出る由であつた。

彼女の手紙が岐阜から廻つたのと共に二通來た。

昨日はきれいなはがき有がたうございましたまあ長良川といふ川はずゐ分きもちのよさうな川ですわねわたしとあなたと長良川とやらに手に手をひいて旅行することもある事でせうねあたしそれをたのしみにして待つてをりますわ、お手紙はけふたしかに拜見致しました益多屋のお千代さんからもよろしくと申しましたおハガキはたしかに御らんになりましたさうです、あなたがお立になつてから早いものですわねもう五日にもなりますわわづか五日やそこいらでもあたしずゐ分たつたと思ひ舛わあなたお里方へいらしておやご樣がさぞおよろこびでせうねあたしもうれしう存じ舛又古里ですぎた前の事をお思ひでせうねそしてさぞおなつかしき事でございませうねあなた旅故おからだをおきをつけて御無事でね、先はお返事まで　十六日のひる前にて

あなたの松子　たびの信さま　返事かく心はゆく御もとへ　わが心は……

そんな風に信一は旅行に出て廿日程の日數、旅行の樂し味は脫がさず味うて居た。そして旅

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

行で得た樂し味で、心持は幾分明るくなつてゐるのであつた。

（如上の出來事があつた）

根岸に行くと、何時もの鏡ノ間を通つて、一足下りる能舞臺の裏側の座敷――その書齋の眞中程に、H師は一閑張の机を据ゑて居た。

信一と顏を合せて、先生はうむと肯いた。

彼は坐つて、旅先で出來た俳句をまづ見てもらふのであつた。清書する暇なくて句稿のノートの儘さし出した。

一應目を通して先生は

「どうも弱いね」

そして具體的に云つた。

「下まで皆一息に云つてあるのは少なく、大抵二つに斷れてゐる。上の句下の句ときれてゐるのは、氣持が張らないのぢやあ、ないかね」

作句はよく云はれなかつた。信一は

「盆槍してゐたのかなア」

と旅行中の自分を顧見た。張つてないと云はれることは、彼女に生溫い氣持でゐるわけ故、痛手であつた。

「中で採ればこれ／＼などかね」

H師は指で敎へながら、句稿を戻した。

尋で信一は、德永翁の事を傳へた。先生は肯いて

「君の考をきいて見ようと思つてゐたが。女は何んな人なのだ」

彼は緣端に横坐りでゐた。

「正直な素直な。あゝ云ふ場所にゐてそれが染てゐないのです」

「女の態度に技巧は見えないのだね」

彼は點頭いた。

「で君は、その人でなけあ、ならぬのか」

「自分の仕事の上からも、ぜひ必要なのです」

「それで」

「女はもう二年程居れば出られるのです。その間一切逢はぬことにしようか、とも考へて居るのですが」

「君は不安はもたないかね」

「大丈夫と思ひます」

先生は色々にたづね、彼は自信づよく女の方も確かであると述べた。

「これから辛いよ、さう思へるがね」

「えヱ」

そんな問答があつた。彼は問の意は深く考へず、いや、味ふ餘裕はなかつた。只答へを云うた。暫時して、信一は

「青舍君の處へいつて來ます」

「うむ」

夕方迄に戻ると云つて彼は出かけた。

青舍と顏を合せた。例の物こま／＼無造作にある居間で、信一は膝をくづした。

「今先生に逢つて來た」

と、根岸の話を云うた。また彼は、半紙の上に旅先の句を書いて、旅行談にうつるのであつた。

諏訪

くわりん花木作りの風日にきてみし
底水になつてる蓮の嫩葉を見下ろし
月のしまひの諏訪の湖水にきて手紙讀む
安房山にて案內者と共に
朝のうち白檜の葉を布きいこふ
カンヂキが朽葉によごれて別るゝなり

田舍にて

今の私の單衣を造りくれる尺をとり

信一は田舍の年上の藝者に出逢つた事を云つた。

「こんどは姉を見るやうに打明話ができたのです」

「徵兵檢査で逢つたとかいふ女のひと」

――以前、徵兵檢査で歸省してもとわけのあつた年上の女と再び結びついた話したが、其折青舍はそんな話があるなら安心だ、之まで用心深くて君は近づけない人とばかり思へたが、と悅んだことがある――

「えヱそのひと」

昔の女に向いて、□屋の女に深入してゐて一寸田舍へきたといつたら、お金を拵へにでしよ、妾は何も出來ませんよ、着物もないのでしよ、などと云つて夏の物を造つて呉れるのであつた……。

信一は出來事を告げた。

友達はにや／＼した。其話を色氣なしに自然に云ふ故。

「複雜なものがあるが、くろうとよりほかもたない心理だね」と肯いた。

そんな工合に話は盡ないが、やがて根岸へ寄

合ふ筈の事を信一は思つた。

而して其晩、上根岸の方の溝川に沿うたある鳥屋へ飯をたべに出かけた。H師、青舍、中田、德永翁と信一の五人づれで。

開業したての家で新しい造りの部屋へ通された。彼はかしはの鍋かと思つたら、一つ一つ調理した品數を運ぶのであつた。彼は神田の方で晝時分蕎麥をたべた腹なので、鳥料理はうまかつた。H師、青舍、德永翁は酒の方であつた。青舍は醉はないと自分の意見は出せない性でまた何か座に居づらい風で酒の力を借りたがるのであつた。

德永翁に向いて、H師は云つた。

「竹内の考は、さき程聽とりました」

「はい」

「僕は是まで左う云ふ噂はきかなかつたし、竹内は女の事などは經驗しなくても分る男だと思つて居りましたが。今度は當り前の人だと思ふのです」

——この二月、雜誌の記念會のあつた晩、青舍が酒に醉つて何か女の話をしやべつて居り、信一は以前の年上の女を頭に置いて、僕はもう通過したなどと一口に云つてのけたことがある——

H師は續けて

「それで竹内は子供のやうに單純なのだ。赤兒の緣端に出てゐるのを見て、いまに落ないか知らと思はれるやうな、あぶない感じがする」

「……」德永翁は點頭いた。

「それで吾々はどうするかだが。僕は唯見て居るほかない。竹内のする通りに任せるのだ」

先生はさう云ひきつて、信一の方を見成つた。

「突放すのは」

と、青舍は顏を上げた。先生は

「中田はどうか」と尋ねた。

中田は前にも云つた、思斷るか、他の意見など顧みずどん／＼行處まで行くか、二タ途だと述べた。自分で後者を踐んで來て居るので、其言には或味があつた。

青舍は

「左うも出來ないさ」と云つて手拭で額の汗をふいた。

「未だ學生でありながら、女のことなどにかゝはつてゐるのは、勉强の緊張が足りないと思はれる」

其は德永翁の詞であつたが、信一は月々學費の援助など受けてゐたが、理解なしに云はれるとは思はなかつた。

德永翁は、皆から意見して貰ひたい鹽梅であつたが、H師も留めるやうには曰はない故、

「これからどうなるか心配だが」

と云つた。先生は笑ひながら

「そんなに心配されるのなら、其家へ往つて女が性の悪い人間かどうか先づ見て來られたら如何です」

而して又、其で駄目になる人間なら之も仕方がないのぢやないかと云ふ意味の事を述べた。

「ひどいな。しかし落膽しないやうに、僕は君についてゆく」

と、青舍は信一に向いて曰ふのであつた。

信一は頬笑んだ。

彼は數島の吸口の紙をほごして三角の筒に折り拵へて、煙草をふかして居た。その三角の吸口が傍のはいふきに幾つも挿つて居た。——それは彼女の卷莨の飲方を眞似た物である。このことでは、中田は圓い吸口のまゝ莨をのむ故、いつか青舍の居間の火鉢に二種の吸口が並び青舍は「ほう」と云つて兩方を眺めた事がある——

信一は先刻から自分の事を曰はれ稍大袈裟故、弱つて居た。始先生に意見され留められるかと思つたら放任される事となつた故、其方は自由になつて有難いと思へた。

H師は信一に向き、左う云ふ場所の女だからいけないと云ふ議論も一理あるし、左う云ふ場所の女に構はず本氣になる氣持も亦肯ける、と云ふ意味のことを述べた。

而して先生は、女中が酌をすると「うむ」と云つて酌をさせるのであつた。

十時頃鳥屋を引揚げた。雨の跡のうるんだ町筋であつた。先生の宅の前で

「寄らないか」

と云はれたが寄らなかつた。德永翁は明日起つて關西の方へ廻り歸國する話をした。

四人になり深い泥の通りを往き乍ら、青舍は

「今晩は、突放すのは非道い」

と、云はぬと氣が濟まぬ故云つた。中田は

「先生は見捨るわけでなく、大きく見てゐるのでせう」と應へた。

「Hが書間竹内の考を聽取つたとかだが、そんな工合に聽いたつて分らぬし、どうも機械的だからね」

青舍は先生とは永年の關係で親しみから呼捨にして居た。

坂本二丁目の方角へ向いて往つた。淺草の方の空は際立つて明るい。信一は彼女に逢ひにゆかうか知らと思つたが、亦旅行から引續の疲れた顏を見せたくない氣持もあつて迷つた。德永翁は

「竹内君は、今晩は學寮へ行つて泊らないか」

と誘ふのであつた。

中田は鶯谷の方へ曲り、入谷へ入る青舍は電車道で電車の來る迄二人の傍に佇んで居た。信一は學寮へ從いて行く事にした。

一の二

かゝりの女中が湯へ往つて居る由で、彼は暫く坐つて居た。

年寄の女將が上つて來、坐つてお時儀した。

――昨年七十の賀の濟んだといふ婆さんだが、面長の含綿といふ物をして居るかのやうな、向合ひ居ると、昔盛りの頃の嬋娟さが滲み出て來るやうな或雰圍氣がある――女將は彼の話について往時の旅のことを云つて相手した。

客に伴はれて仙臺の方へ往き、冬の事で、寺か宮か何でも高い石段のある一杯雪の積むだ所へ見物にいつて、得う段々を上らなかつたと云ふ噺。

彼は年寄の話の聽手になつて、筋でなしに情緒を語る噺故事柄はもどかしかつたが、聽き方で面白味はあつた。

かゝりの阿千代は、湯上りの額に汗をつけて入つて來た。何時も曲げつけた頭髮の簡單な、四十年增である。

直ぐあちらへ行くことにして、彼は今夜は少し飲むと云ふ故、阿千代は首の細長い酒德利をさげて出た。そして誂物を云ひにいつて來る間、彼は人通りの多い口屋の前に佇んで居た。

書間電話でお座敷の方を云つて置いた故、すぐに三階の彼女の所へ通つた。

次の六疊の居間で、長火鉢の傍の松子（茲の通稱でなしに、彼女の本名で書く）は、ネルの膝を移して大きい座布團を讓つて、彼女は並の客布團に坐つた。島田髷に水色の結綿をかけて、顏の下方の濃い白粉の間に、唇は稍吹出物で傷んで居た。

附人の阿米は、稍億劫さうな顏であつた。――三十臺半ば過の獨身者で一國な性で、茲の慣習を横に破るやうなことは罪惡と考へて居る新造で、學生の信一の其一本氣をイヤがつてをる――

「珍しくおあがりになるんですね」

阿米は皮肉に云つて、した新に、酒の方の支度をさせた。彼の附添の阿千代は阿米と友達附合の間柄であつた。

其座で、彼の往つて來た旅のことが又話材になつた。松子は話の興を助る爲、用箪笥の開きをあけて旅先から來た風景繪端書などを持出して皆に見せた。信一は嶽山の未だ冬のなりの雪のある場所を案内者について山越をした咄をした。

軈て阿千代は

「亦こちらがせはしくなりますから、一寸およつたら」

と彼に云つて、座敷へ行くのであつた。

電燈が葭屏風ごしに鴨居に下つて居る。例の十疊間で彼の世話をして阿千代はそこへ彼女の來るのを見居けて、尙夜中にお腹が空く故幕の内か何か居けると云置いて、女中は去るのだつた。

信一と松子と顏向合せた。目戍り暫時口には云はなかつた。

「また唇が傷んでをるナ」

「えエ」松子は手の指を括枕と耳朶との間に挿んで居た。

「諏訪の方への手紙、けふ下宿へ廻つて來た」

「……」

二人だけの場合の話を始めた。信一は昨日根岸での出來事を大體聞かせて

「先生や皆がそんなに心配するのは、行々僕が何かやる見込がある故」

そして又

「先生に意見されるかと思つたら左うでなく、自由にせよと云はれた。今度から晴て逢ふ事が

出來るのだが、お前さんも其心組で居て呉れ」

信一は幾分押つける工合に、すべて松子を中心として、今後どうする其相談などまで曰ふ。

松子は別段感動は見せず、いや寧、嚴い表情で居た。少時だまつた跡、松子は

「妾、本當の事を申上げますわ」

と、二人が一緒になれるか何うか分らぬ事、其考でをるのなら思ひ直して欲しい、互に戀し合つてゐては彼女の立場から弱る場合が必ず起る、其故彼の申出を斷る、左樣な事を曰ふのだつた。

何故さう云ふのか何か腹が立つことがあつてかと信一は尋ねた。松子は

「いゝえ。戀ではないのです。其麼お話を承りますと唯困りますわ」

と正直に云つた。

「今迄、嘘云つて居た」

「……」

彼女はヂッとして表情は眞面目であつた。

其云つてる曰ひは、信一の頭に段々實感になつて來た。二人は口を噤んだ。

次の唐紙の外から阿米の聲が呼立て、松子は應へて體を立て出てゆくのだつた。何時もは一言殘してゆくのだが、工合悪いなりずつと出て往つた。

そして時間が經つた。次の間から呼ばれて、信一は氣乘がなく起てゐつた。眞新しい立縞の湯帷子に包れ座布團に胡座で、信一は凡そ無口であつた。「茲の氣分に自分は先程と異つて居る」左うひとり思つた。一鉢の幕の内に箸を附け、湯呑をもちあげた。

何氣ない面持で松子は坐つて居た。食物の話で、夜中の十二時過の握鮨はまづい、そんな事を云つて居た。

阿米は彼の方へ云ふ。

「ずゐ分夜が短うムいますね。三時打とすぐ白んできますよ」

「うん」

「では、ゆきましよ」

と云つて、松子は膝を上げた。彼は亦座敷へ入るのだつた。

二人だけになり、前の曰ひが口に上つた。

何時も沈んだ方で、遊好でもないのにこんな場所へ來る其心持が氣の毒になつて、同情の思ひから、人より深切に素振は出たが、もとより戀ではなく唯氣の毒に思つた……と、松子は心根を出した。

「お友達やみなさんに御心配をかけて悪うムんすわ」

聞いて、信一は自分の思ひを云ふほかないのだつた。

石の樣にではなく、氣の毒がる心があるのなら、已に何物かがあるわけで、其何かが足掛りになる故、何時かは心が動くだらう、其折を待つほかない。

松子は

「それは妾は冷たい心なんですよ、こんな者は見限つて下さる方がよござんすわ」

「ではもう逢はない心算」

「商賣してる上は、お客は斷ることは出來ませんわ」

そして斯麼所に暮してゐて到底戀などの氣持は出て來ない、彼女の立場を云うた。

稍たかい敷布團の上に、ふたりは二個の直線で暫くさうして居た。脚先の麻布團を彼女は引張りあげ眞面目な眸で

「まだ他にも廻らねばなりませんから早く致しませう」

そして濟んで直ぐに彼女は出てゆくのだつた。重たい草履の音を曳ずり、段梯子をずつと階下までがたん〳〵降りてゆく。

あと、彼は一人置かれた。次の間へいつて他の者と話する程の氣輕になれず、寢附かれぬ故、弱つた。「どうしよう」彼は呟いて思ひ惱んで居た。

次の間まで女は戻つて來、間の唐紙の根に据ゑてある例の鏡臺で顏を直しては、また名代の方へ出てゆく。さうして朝迄くり返されるのであつた。

其なり朝になり、緣側の方より座敷の障子をした新が開け擴げた。やがて、何時もの通り茶屋から出向いた阿千代が入つて來て枕元へ坐り、

「およれましたか」

と云つて彼の顏に覗き込むのであつた。

一の三

信一は用事の外は電車に乘らぬ人で、吉原の

朝戻りには金杉の裏通りを歩くのであつた。

よい天氣で、人氣の少い塀續の路をゆき乍ら、信一は妙に輕い頭であつた。昨夜彼女の曰ひで別々だと分つて、今は肩の重荷が拔けて居る。清々した頭の自身を劬り、亦四邊の目に映る物が眞新しい感じ故、不思議がり乍ら歩いた。――孤獨になつた故さう云ふ感があるのだが、彼は未ださう知らなかつた。

入谷へいつた。

「一寸出てくれませんか」

と、信一は上らずに友の顏をみた。外歩いて曰ひたかつた。

そして二人して、鶯谷から上野の杜へ往つた。櫻んぼうの目につく葉間の。

信一は昨夜の一五一十を語り出すのだつた。先程重荷の肩より拔けた感と共に遥か過去の出來事かのやうに思はれたのだが、一人で蟲のよい考であたが、いま友達と並び友にきかれると、其は過去でも夢でもないのだつた。

信一は、未練もあり捨者になつた氣の恥もあり、其故、何もかも自分の弱點を暴露したがつた。

「うむうむ」と聽く友の傍では。

彼は喋りながらどん〳〵歩き、一筋の道を脇へ折曲れなかつた。大分歩いたと思へたが目覺えぬ通りで、木藪、畑、生垣の疎な家並だつた。新開のだゝ廣い往來へ出た。（道灌山、田端、中里、飛鳥山の新道路）そこは初めての路だつた。信一は飛鳥山も初めてで、むつといきれのするうす汚い土手で見物の思もなかつた。

とある境内に入り、其權現の樹立に凭る心もなく日はまぶしく、うろ〳〵と居た。長い石階を降りかけ青舍は下向いて

「落ちさうでこはい」

と、石段降りるをやめ戻るのだつた。

王子、田端、日暮里、根岸と又歩き話して戻つた。

午後、淺草の或活動小屋の中に腰掛て、三角の紙袋の落花生をつまみ豆を嚙んでゐた。二階の窓は開いて空の暮色が眼に入り「日が暮れた」と呟いて信一は寂しがつた。

中清へ上り飲食を濟してから青舍は云ふ。

「今晩はどうするかね」

「三ノ輪へ往きませう」

「さうかねエ」

友は點頭いた。日曜で晝と晩と二回、三ノ輪に仲間の句會がある。信一は雜誌をやつてをる故會をすかすのは惡いと思つた。

次の日、引籠つて居た彼は青舍の手紙を受取つた。

ゆうべ會の歸り私等から離れて電車に乘られた時は何とも私の心にはなかつたのですがけさになつてそれが氣になりだしましたしかしたゞ何となく氣になつた迄です。

あなたと電車の處で別れて例の三人が坂本二丁目迄あるく間にH師は又あなたのことについていろ〳〵話がありましたそれについて私としては新しく起つたあなたの心の動搖を話さねばならぬ機會になりましたが暫く此動搖の經過をあなたと私との間に見ようと、御約束した事故H師にあきらかに話すことも出來ず隨分苦しい立場になりました。

それで具體的に言はずに何となく何事か今迄にない動搖が起りつゝあるといふやうなことを暗示して置きましたさうして暫く此儘にして置きたいとも申しましたそこで歸つてから私はいろ〳〵考へました今度起つたことはどうもH師に話さないといふことはあなたとしてもまた私としても心がすまないのではあるまいかと思はれて來ました何事に係らずいろいろ心配してくれるH師の心に對してですそれで私としてはあなたからH師にきのふ私に話された事をうちあけてほしいと思ひます定めし御つらいこともあるでせうがそれが我我同心の道かと思はれますそれでどうかきのふの祕密といふことは苦しいことはやめにしてほしいと思ひますあなたの爲にも私にもこれはよく御考へ下さいこれのみ申上げます

六月四日朝　青舍

――僕等の周圍は動いてゐるけれど向うの周圍は殆ど動かない故、女の人のさういふ斷りがあつたのだと思ふ。女の人が心變りしたのではなく、周圍の事情からやむを得ないのぢやあないかね。さういふ言葉の出てくる處に、女の人の並々ならぬ厚意のある事が思はれる。亦、女の人が曖昧なことを云つて居れないのは、君の態度の力强い故だと思ふ――

青舍は昨日かやうな意見を述べてゐた。信一は憶出した。が現在淋しく、電燈つけた障子の中の疊に寢そべる男だつた。

六日の晩、根岸の先生の宅の俳三昧で、例の四人が寄つた。

お前の正直な日がくれて夏座布團　信一

塀の下の苺のつきゐる發ち出づる

句評などが濟んだあとで、彼は、今度の女との間のことを曰うた。先生は

「善良な女のやうだね」

と肯いた。信一は當にならぬ女だと不服を曰ふと、先生は、人間は皆弱點がある故と云うた。

中田は

「さういふ風に進んだのなら、其で打斷るんだね。これで濟めば美しい話ぢやあ、ないか」

と判斷して

「このあと續けて往つたら、次は非道い目にあふよ」

と云ふのであつた。

遲くなつて何時もの道の上へ出た。明りを投てをる店屋はかぞへる程の大通りを、三人、なほ話して行つた。

信一はまた旅行したいと曰うた。——根岸の庭に實つてゐる苺を早その心でながめ出立の句など今晩作つた。京都には德永翁が逗留中だし大阪の叔母にも逢ふ事を思つた。亦、田舍の年上の人が今月半ば頃大阪の親元へ一寸戻るといつて來た故、或はまた逢へるかとも思へる——

鶯谷の曲角で、青舍は入谷の方へ向ひ、二人になつた。信一は上野の山から神田迄歩くのだ。

中田は云つた。

「今旅行する場合でないと思ふね。ヂツと氣持を耐へてをる方がよい」

そして、元の藝者にあふことでは其間柄を知つてをる中田は、反對を云ふ。

「そんな二タ心はなからう。こつちの女はどうなるのかな」

「獨りになつて、友達はあるけれ共、猶、女の友達のいる心持なの」

「そんなのは、女の心を無にするのだ。女一人を殺すのぢやあ、ないか」

踏切を渡り、別れる場所で稍佇んで向合つて居た。やがて終電車の音の氣配なので、信一は

「では」と云つて隔たるのであつた。

——彼は七日の晩關西の方へ起つた。中田の言葉に反いて惡かつたが、心持は思留ることが六ケ敷かつた。いきほひ日常生活にすぐは戻れないのであつた。

（旅先のことは略）

彼が旅から戻つた日。——第四日曜で、根岸の舞臺に催能がある。信一は午過であつたが、H師、青舍にも逢へるから往つて見ようと思つた。梅雨の降りである。

ゆくと、襖障子皆取除けられた、廊下迄溢れた人の背ろを紋附に絽袴でやつてくる先生、今日四番目物の安宅のワキをつとめる、先生は信一を見て「うむ、うむ」と只點頭いた。

舞臺の手前の露地は座敷際迄假棧敷が出來て、上は油紙が張り渡してある。境目の肱掛窓のきはに、青舍が七つになるその息女と共にワキ正面の場所で見物してゐた。人が一杯詰つてゐる後方で信一は坐つた。雨が大降りで油紙がたるみ、假棧敷へは雨水が漏れ落ちた。手傳ひの娘さんがいそいで桶をもち運んだ。信一は此若い娘さんが座敷の肱掛窓の境を何樣に跨ぐかしらと思つて見てゐた。と、桶を先づ措いて窓緣の上に膝を折曲げ坐る工合にして越えた。信一がお能よりもこんなことに惹かれる。否、頭に問題のある此頃、若い女の動作が殊に目に留るのだ。

安宅と、つぎの狂言の蝸牛の終つた處で、青舍は起つて、歸りかけた。信一は從いて外へ出た。

「勸進帳などと恰で氣合の入り方が違ふね、調子の高いものだね」

と青舍は能の安宅に感心した。H師は前に何時か、吾々がどんなにうまくなつた所で家元の目には「お素人です」と云はれるのだ、と左う云ふ藝の咄があつたが。

日が暮れて、二人は雨の中を淺草の方へ歩いた。そして青舍は選好みなしに或西洋料理店へいつた。信一は咄つゞけた。明るい大理石板の前で。

信一は年上の女との出來事を云つた。

——大阪では逢へなかつたが手紙で打合せて、二人は箱根へ遊びに出掛けた。四日一緒に居た。四五年田舍の自前で相當の貯金なども出來たが

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com